

なれば、科の概念は既成のものがあるという雰囲気は醸しかねず、その意味では、まだよく分かっていないということ、独特の体系で示すという意義はあるのかもしれない。しかし、一方で、植物名がしばしば変更されて困るという利用者の要望から、植物の統一名リストを作ろうとしている時代に、一般の利用者は無視して分類体系を研究する者だけが使えばよいとでもいうのか、無用の混乱を招くのはあまり賞められたこととはいえない。

具体的にいうと、シダ植物の科について、コバノイシカグマ科、イノモトソウ科、オシダ科が広義に取られているのに対して、オオフジシダ科、タマシダ科などが独立に扱われる。また、ヒメウラボシ科、コケシノブ科、ヒメシダ科などで、属が比較的広義に定義されるのに対して、ヒカゲノカズラ科、ウラボシ科などは細分説に依ってまとめられている。多数の著者が関与すれば多少の体裁の不一致は我慢しなければならないが、編集方針として、分類群の設定の方針は著者に任されていた。問題の在りかを直截に描き出すことをこそ意図されたというべきだろうか。それならば、読者ははじめからそのつもりで接しなければならない。この抄録でも、体系を頭から丸呑みにする利用の仕方をしない方がよいということをはっきり指摘しておきたい。

問題を現代的に捉えるきっかけとしては、示唆に富んだ論述が随所にみられる。元来、分類体系を論じる書は問題提起が最重要課題であり、その意味では本書の編集はよい成果をあげているといえるだろう。(岩槻邦男)

□中国植物志 第三卷第一分冊 i-x+306pp+77 pls. 1990. 科学出版社, 北京. 平装本 18元, 精装本 21元.

中国植物志のシダの部分は、1959年に第二巻が出て以来沈黙を続けていた。その間、文化大革命の時代に、秦 仁昌先生が準備しておられた2巻分の原稿が焼き捨てられるというような不幸な事件もあったと聞いている。久し振りに姿を見せることになったこの部分では、ワラビ科、イノモトソウ科(呉 兆洪)、ミミモチシダ科、ステノク

ラエア科、ヒメウラボシ科の大部分、イヌアミシダ科(邢 公俠)、ヒメウラボシ科の残りの一部(武 素功)、ホウライシダ科、ミズワラビ科(林 尤興)がそれぞれに示した著者によって著わされている。

秦 仁昌先生が亡くなってから、中国のシダ学者の間には、過度に細分された秦システムに反省が始められてはいるものの、本書の科や属の配列は秦システムに従ったものである。批判をする人はあっても秦 仁昌先生を凌駕して多くの人を納得させる修正を提議できる人はないということである。しかし、種の扱いについては、マレーシア植物誌と比べれば細分主義だといえるものの、それなりに分かりやすく、国際的な通念に照らしてもよく理解できるものになっている。日本のシダとの対応のためにも大変便利な書であり、中国の人達の研究成果が見事に結実したものといえる。残りの部分が順調に刊行され、1959年の第2巻が改訂されることを期待したい。(岩槻邦男)

□中尾佐助: 分類の発想 B6版. 331pp. 1990. 朝日選書. ¥1,300.

分類ということは社会のあらゆる面で行われている操作である。著者はそれを生物学の面で考えてみようとして異色の本である。分類学にとってはそれがかなりの比重を占める研究手段だから、その基本的な論議がなされなければならないのだけれど、今迄そのような論議は殆どされたことがなかった。問題を提起するだけでも意義のある試みである。著者は分類を類型分類、規格分類、系譜分類に大別し、それ等を総合したものを動的分類と呼ぶ。こうした概念を基に生物学の様々な事象を例として解説している。著者の関心は生物学だけでなく、人類学、言語学から宗教にまで及び著者の興味の広さを思わせ、私のようなその方面に門外漢のものには面白く読ませる所でもある。折角の中尾氏の貴重な提案だから、それを批判することで今後の実りのある発展を期待したい。

著者は分類という言葉を非常に広い意味に使っている。普通の分類の概念からはみだしているのにとまどいを覚える。自家不和合は雌しべが花粉を類別することによるが、これをアイデンティ